

佳作

感どろのキエフバレエ

茨城県ひたちなか市立外野小学校四年 岡部 可奈

わたしは、七月の終わりごろに、お母さんとウクライナのキエフバレエを見に行きました。バレエは、チュチュというキラキラして、色もきれいでフワフワした衣しように着ます。音楽にあわせて、おどりによって、感情や意思を表げんします。手足がとても細くて長く、体はともやわらかい。トウシューズをはいて、つま先で立って、かるやかに高いジャンプ。そして回転。

「コッソコッソ、コッソコッソ。」

と、ぶたいから足音が聞こえました。バレエが好きになった理由は、図書館で、『リトルバレリーナ』と『マイヤ・プリセツカヤ』という本を読んだからです。特に、『リトルバレリーナ』は、バレリーナになるために、つらいことがあっても、のりこえてがんばって努力をするお話です。私

は、がんばるすがたがすてきたと思いました。

ある日、お母さんが、新聞を見て、県内でキエフバレエがあることを教えてくれました。わたしは、本物のバレエを見たいとずっと思っていたので、バレエを見に行くことが決まって、毎日ワクワクしていました。予定では、とても有名なチャイコフスキーが作曲した『白鳥の湖』、『ねむれる森の美女』をおどることになっていましたが、ロシアとウクライナの戦争により、おどることができなくなったそうです。チャイコフスキーがロシア人という理由で、さんねんながら、見るのができませんでした。

会場は、ほぼまん席で、たくさんの人が来ていました。初めて見る本物のバレエだから、すごく楽しみでした。ブーと、ブザーがなり、会場が暗くなって、まくが上がりました。明るい音楽が流れ始め、男せいダンサーたちの大きなジャンプが、目にとびこんできました。

次に、『海ぞく』という作品の、『花園のおどり』では、むらさきやピンク、青緑などの、カラフルなチュチュが、花畑のように見えました。そして、花輪を持ったダンサーたちはとてもはなやかですてきでした。

一番心にのこった作品は『ひんしの白鳥』です。白鳥のような白いチュチュを着て、羽のよううでの動きは波のようになやかで、おどろきました。すべてのおどりが終わってダンサー全員がぶたいに出てきました。ウクライナの国旗やひまわりのうちわを持ってみんな立ち上がって大きなはく手をしていました。私も手がいたくなるまでたくさんはく手をしました。みんなとても感動した様子でした。

今、ロシアとウクライナでは戦争がおきています。私にできることはチャリティーバックを買うことです。お金の一部がウクライナの人たちに届くことです。戦争のせいでウクライナのバレエを見ることのできなくなったらとても悲しいです。ウクライナのバレエがなくならないように、早く戦争を終わらせてほしいと思います。バレエ最高でした。